

報道関係各位

2025.03
福田美術館
嵯峨嵐山文華館



京都の巨匠・木島櫻谷 画三昧の生涯

嵐山に櫻谷展が帰ってくる！名品とともに人物像にも迫る回顧展

木島櫻谷（このしまおうこく・1877-1938）は、伝統を受け継ぎながら徹底した写生を礎に独自の画境を切り開いた近代の巨匠です。この度、福田美術館と嵯峨嵐山文華館では、2021年の「木島櫻谷展」から約3年半の時を経て、2館共催の回顧展を開催します。本展では、櫻谷の到達点を示す代表作はもちろん、約100年以上の間行方不明だった櫻谷と岸竹堂の共作《嵐山清流》など新収蔵品の数々も紹介します。第1会場・福田美術館では、櫻谷の若き日の意欲作《細雨・落葉》や、第6回文展の出品作《寒月》（京都市美術館蔵・2週間限定展示）、第7回文展の出品作《駅路之春》など名画の数々を展示します。また、櫻谷が師事した今尾景年（けいねん）をはじめ、私淑していた菊池容斎（ようさい）、木島家と交流のあった岸岱（がんだい）、岸竹堂（ちくどう）など周辺の画家たちの作品も取り上げ、櫻谷芸術の源流を追究します。第2会場の嵯峨嵐山文華館では櫻谷作品とともに、櫻谷に続いて衣笠にアトリエを構えた画家たちの作品、菊池契月（けいげつ）《在五中将》、堂本印象（いんしょう）《鳥流玄詠》、小野竹喬（ちつきょう）《比叡》、徳岡神泉（しんせん）《鯉》なども紹介します。同時代を生き、同じ環境を求めた彼らの芸術が一堂に集うだけでなく、遺品の展示などを通して生涯画家であり続けた櫻谷の人となりにも焦点を当てます。

近年再評価が高まる櫻谷の魅力に迫る、2館同時開催の大規模な回顧展です。

会期：2025年4月26日（土）～7月6日（日）

前期：4月26日（土）～6月2日（月） 後期：6月4日（水）～7月6日（日）

※《寒月》展示は4月26日（土）～5月10日（土）

- 【主催】 福田美術館、嵯峨嵐山文華館
【後援】 京都府、京都市、京都市教育委員会、京都商工会議所
【会場】 第1会場：福田美術館 第2会場：嵯峨嵐山文華館

第1会場：福田美術館

第1章 画三昧の日々

若くして頭角を現した写生画の天才、「画三昧」のはじまり

京都の三条室町に生まれた日本画家・木島櫻谷は、16歳から花鳥画を得意とする今尾景年に師事し、徹底した写生を礎に若くして画名を知られるようになりました。明治時代の絵の勉強といえば、手本通りに対象を描き写す「臨画」（りんが）が主流でしたが、櫻谷は漢詩にも精通していたうえ、歴史画を得意とする菊池容斎に私淑し、洋画家の浅井忠（ちゅう）とも交流して芸術への造詣を深めていました。こうした努力が実を結び、青年期から頭角を現した櫻谷は、明治40年（1907）に始まった文部省美術展覧会（文展）において動物画、歴史画、風俗画など多岐にわたる画題で6年連続の上位入賞という快挙を成し遂げます。

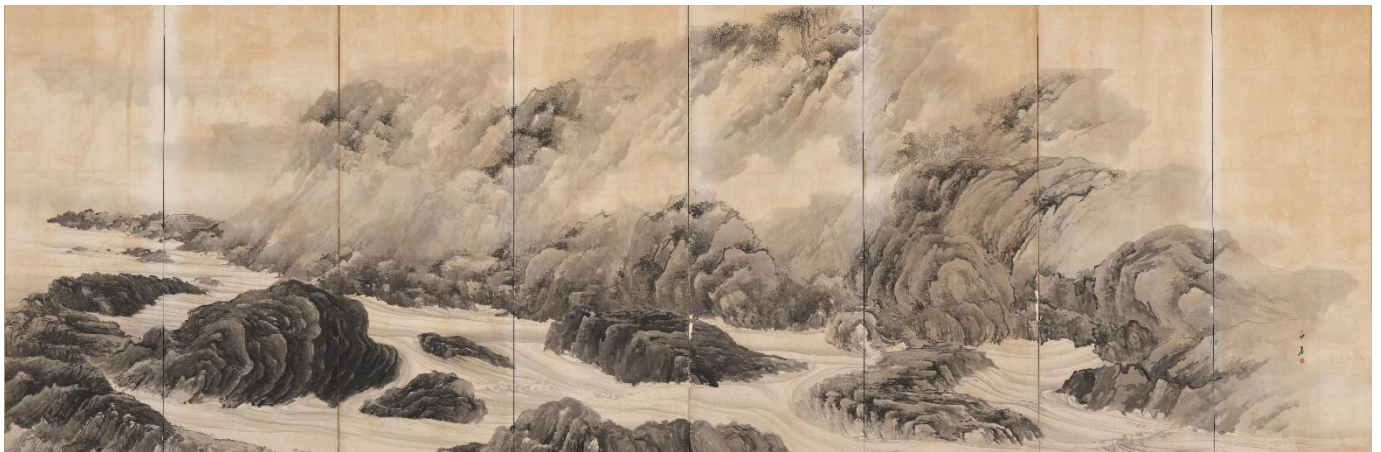


木島櫻谷《剣の舞》（部分）明治34年（1901）
公益財団法人櫻谷文庫蔵 通期展示

また、文展が帝国美術院展覧会（帝展）として改組された後も、櫻谷は大正9年（1920）の第2回展から審査員を務め、京都を代表する画家として活動を続けました。第1章では彼が若い頃に描いた作品や展覧会出品作とともに、櫻谷と関連のある画家も併せて紹介します。

第2章 京都の巨匠・木島櫻谷

100年以上もの間行方不明だった《嵐山清流》に注目



岸竹堂《嵐山清流》右隻 明治10年代（1877～1886）（福田美術館蔵）通期展示

他人との関わりをあまり好まなかった櫻谷は、大正2年（1913）になると京都の市中から北西に位置する衣笠へ移住し、制作の傍ら、趣味の詩書に心を寄せる隠居生活を送りました。一方、画家としては人々から大きな期待を寄せられ、帝展の審査員を務めるほか、海外の展覧会にも出品を依頼されるなど、京都を代表する画家としてゆるぎない地位を築きます。櫻谷は58歳で明治神宮聖徳記念絵画館の壁画を完成させて以降、徐々に体調を崩し始めますが、決して筆を置かず、最期まで画家であり続けました。そして昭和13年（1938）11月3日、家族や門弟と松茸狩りにでかけた日の夜、電車と接触し、急逝しました。第2章では100年以上もの間行方不明だった櫻谷と岸竹堂の共作《嵐山清流》、4月26日（土）から5月10日（土）までの2週間限定で展示する名作《寒月》など、文展での活躍期から晩年期にいたるまでの精緻で優美な作品を紹介します。

第3章 京都の精鋭画家たち

櫻谷と同時代の京都画壇の「扇絵」

古くから日本では、扇子や団扇など工芸品のデザインを画家に依頼することがありました。第3章で紹介する《京都画壇名家団扇》は、「オハグロトンボ」や「京茄子」など夏の風物詩が描かれた団扇計12幅を掛軸に仕立てた作品です。木島櫻谷をはじめ、今尾景年、鈴木松年（しょうねん）、菊池芳文（ほうぶん）、竹内栖鳳、神坂雪佳（かみさかせっか）、谷口香嶠（こうきょう）、山元春拳（しゅんきょ）、西村五雲（ごうん）、西山翠嶂（すいしょう）、菊池契月、川村曼舟（まんしゅう）ら京都を中心に活躍した画家たちが、団扇というキャンバスに各々の感性を活かして描いています。当時人気画家だった櫻谷も数々の扇絵を手掛けており、公益財団法人櫻谷文庫には扇面233点、団扇51点が現存しています。福田コレクションが所蔵する櫻谷の扇絵3点とともに、夏らしいさらりと洒落な作品の数々を展示します。



《京都画壇名家団扇》十二幅対のうち菊池契月によるもの（福田美術館所蔵）通期展示

【作品点数】
福田美術館：通期 28 前期 16
後期 14 合計 58点
※うち初公開：19点

第2会場：嵯峨嵐山文華館

第1章 衣笠絵描き村の画家たち

櫻谷と共に「衣笠」で絵を描いた画家たち

櫻谷が拠点移した閑静で自然あふれる衣笠の環境が作品制作にも適していたのか、同地にはその後、菊池芳文・契月父子やその塾生たち、土田麦僊（ばくせん）、村上華岳（かがく）、小野竹喬をはじめとする国画創作協会の若手画家などが集うようになります。そのため衣笠は「絵描き村」と呼ばれるようになりました。

第1章では、衣笠にアトリエを構えて絵筆をとった画家たちの作品を取り上げるとともに、同地への移住を先駆けた櫻谷の作品を展示します。また、櫻谷の息遣いを感じられる、愛用の帽子やトランクなどの遺品も公開します。



山口華楊《晨》（部分）昭和44年（1969）
（福田美術館蔵）後期展示



木島櫻谷所用 帽子・トランク・時刻表・矢立
（公益財団法人櫻谷文庫蔵）通期展示

第2章 画三味の生涯

生涯画家であり続けた櫻谷の穏やかな優しいまなざし

衣笠に隠棲しながらも、晩年まで人気画家であり続けた櫻谷。その背景には、彼が画壇に認められるほどの技術を有していたことはもちろん、多くの人々に愛される作品であったことも考えられます。

残された写生帖は約600点にも及び、画家として研鑽を重ねてその地位をゆるぎないものとした一方、性格はもの静かで穏やかであったと言われます。第2章では、初公開作品や、櫻谷が取り組んだ多様な画、人となりが偲ばれる書なども展示します。

昭和13年（1938）に電車事故で亡くなるまで、「画三昧」の人生をかけて究め、描いた作品の数々を紹介します。

【作品点数】

嵯峨嵐山文華館：通期 24 前期 15 後期 11
合計 50点 ※うち初公開：17点



木島櫻谷《馬図》明治40年（1907）（福田美術館蔵）
前期：福田美術館/後期：嵯峨嵐山文華館展示

プレス用画像（福田美術館展示）

※広報画像は以下の申請フォームよりダウンロードいただけます。

<https://tayori.com/f/oukoku2025/>

※トリミング可。その場合キャプションに（部分）と表記



①木島櫻谷《鶴図屏風》（左隻）大正～昭和時代
（福田美術館蔵）通期展示



②木島櫻谷《鶴図屏風》（右隻）大正～昭和時代
（福田美術館蔵）通期展示



③木島櫻谷《嵐山清流》（左隻）明治41年（1908）頃
（福田美術館蔵）通期展示



④岸竹堂《嵐山清流》（右隻）明治10年代（1877～1886）
（福田美術館蔵）通期展示

プレス用画像（福田美術館展示）

※広報画像は以下の申請フォームよりダウンロードいただけます。
<https://tayori.com/f/oukoku2025/>

※トリミング可。その場合キャプションに（部分）と表記



⑤木島櫻谷《駅路之春》（左隻）大正2年（1913）
（福田美術館蔵）5/11～7/6展示



⑥木島櫻谷《駅路之春》（右隻）大正2年（1913）
（福田美術館蔵）5/11～7/6展示



⑦木島櫻谷《和楽》（左隻）明治42年（1909）
（京都市美術館蔵）



⑧木島櫻谷《和楽》（右隻）明治42年（1909）
（京都市美術館蔵）



⑨木島櫻谷《剣の舞》明治34年（1901）
（公益財団法人櫻谷文庫蔵）通期展示



⑪木島櫻谷《秋野孤鹿》
大正14年（1925）
（福田美術館蔵）通期展示



⑫木島櫻谷《孔雀》
昭和4年（1929）
（公益財団法人櫻谷文庫蔵）
通期展示



⑬木島櫻谷《峡中の秋》
昭和8年（1933）
（公益財団法人櫻谷文庫蔵）通期展示



⑩木島櫻谷《画三昧》
昭和6年（1931）
（公益財団法人櫻谷文庫蔵）
通期展示

プレス用画像（嵯峨嵐山文華館展示）

※広報画像は以下の申請フォームよりダウンロードいただけます。
<https://tayori.com/f/oukoku2025/>

※トリミング可。その場合キャプションに（部分）と表記



⑭菊池契月《在五中将》昭和時代
（福田美術館蔵） 通期展示



⑮木島櫻谷所用 帽子・トランク・時刻表・矢立
（公益財団法人櫻谷文庫蔵） 通期展示



⑯木島櫻谷《細雨・落葉》（左隻）明治38年（1905）
（福田美術館蔵） 前期：福田美術館/後期：嵯峨嵐山文華館展示



⑰木島櫻谷《細雨・落葉》（右隻）明治38年（1905）
（福田美術館蔵） 前期：福田美術館/後期：嵯峨嵐山文華館展示



⑱山口華揚《晨》昭和44年（1969）
（福田美術館蔵） 後期展示



⑲木島櫻谷《松鶴図》大正時代（福田美術館蔵）
前期：福田美術館/後期：嵯峨嵐山文華館展示



⑳木島櫻谷《馬図》
明治40年（1907）
（福田美術館蔵）
前期：福田美術館/
後期：嵯峨嵐山文華館展示

展覧会概要

- 企画展名 「京都の巨匠・木島櫻谷 画三昧の生涯」
- 会 期 2025年4月26日(土)～7月6日(日)
 <前期>4月26日(土)～6月2日(月)
 <後期>6月4日(水)～7月6日(日)
 ※《寒月》展示は4月26日(土)～5月10日(土)
- 開館時間 10:00～17:00 (最終入館 16:30)
- 休 館 2館共通：5月13日(火)、6月3日(火)、6月17日(火)
- 主 催 福田美術館、嵯峨嵐山文華館
- 後 援 京都府、京都市、京都市教育委員会、京都商工会議所
- アクセス
 - 第1会場／福田美術館
 〒616-8385 京都府京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町3-16
 JR山陰本線(嵯峨野線)「嵯峨嵐山駅」下車徒歩12分／阪急嵐山線「嵐山駅」下車
 徒歩11分／嵐電(京福電鉄)「嵐山駅」下車徒歩4分
 - 第2会場／嵯峨嵐山文華館
 〒616-8385 京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町11
 JR山陰本線(嵯峨野線)「嵯峨嵐山駅」下車徒歩14分／阪急嵐山線「嵐山駅」下車
 徒歩13分／嵐電(京福電鉄)「嵐山駅」下車徒歩5分
- 料 金

	一般	高校生	小・中学生	その他
福田美術館	1,500 (1,400) 円	900 (800) 円	500 (400) 円	* 障がい者と介添人1名まで各900 (800) 円 * 幼児無料 * () 内は20名以上の団体料金
嵯峨嵐山文華館	1,000 (900) 円	600 (500) 円	400 (350) 円	* 障がい者と介添人1名まで各600 (500) 円 * 幼児無料 * () 内は20名以上の団体料金
二館共通券	2,300円	1,300円	750円	* 障がい者と介添人1名まで各1,300円

プレスリリース／広報用画像に関するお問合せ

福田美術館／嵯峨嵐山文華館広報事務局 (共同ピーアール内)
 担当：田中真衣、樋口
 TEL：03-6264-2045
 Email：fukudamuseum-pr@kyodo-pr.co.jp

一般の方からのお問合せ

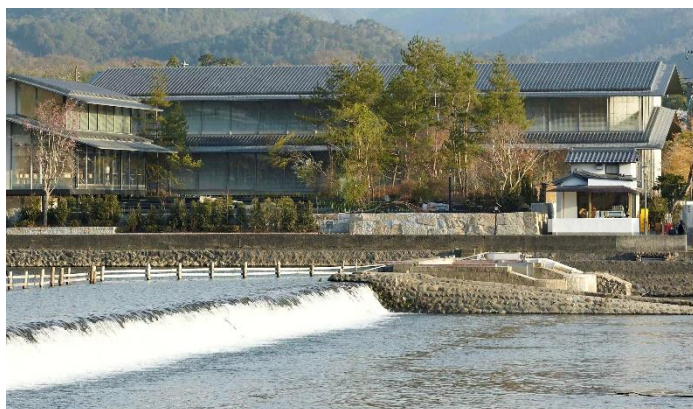
福田美術館 TEL：075-863-0606 (代表) Email： info@fukuda-art-museum.jp
 嵯峨嵐山文華館 TEL：075-882-1111 <https://www.samac.jp/contact/>

福田美術館について

美しい自然と日本美術の融和。日本文化の新たな発信拠点として

京都・嵯峨嵐山は古来歌枕でもある場所で、多くの貴族や文化人に愛され芸術家たちが優れた作品を生み出す源泉となってきました。オーナーである福田吉孝は京都に生まれ育ち、そこで事業を興し、今日まで続けてきたことに対し、地元の方々のご支援とこの地に恩返しをしたいという想いから、2019年10月、美術館の設立に至りました。今や日本国内だけでなく、世界中から多くの人々が訪れる観光地である嵐山。その中でも渡月橋を望む大堰川（桂川）沿いの景勝地に位置し、四季折々にそれぞれに変化する風景は1000年変わらず人々を魅了してきました。この美しい自然と共に日本美術の名品を愉しんでいただくことで、嵐山が世界有数の文化発信地となることを願います。

福田美術館は2024年10月で開館5周年を迎えました。今後も「100年続く美術館」をコンセプトに、現代まで受け継がれてきた日本文化を次世代に伝え、さらなる発展へとつなぐ美術館を目指します。



嵐山にふさわしい、未来へむけた日本建築の形

福田美術館の建築を手掛けた安田幸一氏は、「蔵」をイメージした展示室や外の自然とのつながりを感じられる「縁側」のような廊下など、伝統的な京町家のエッセンスを踏まえつつ、これから100年のスタンダードとなるような新しい日本建築を目指しました。また、庭には大堰川に連なる水鏡のごとく嵐山を映し出す水盤が設けられており、渡月橋が最も美しく一望できるカフェからは最高の眺めを味わうことができます。



嵯峨嵐山文華館について

百人一首の歴史と日本画の粋を伝えるミュージアム

1000年以上も前から歌枕として詠まれ、愛されてきた嵯峨嵐山の風景。当館はこの地で誕生したと伝えられる百人一首の歴史やその魅力と、日本画の粋を伝えるミュージアムです。石段を上がり、冠木門をくぐって足を踏み入れると、春はしだれ桜、初夏はサツキツツジ、秋は紅葉、冬は冠雪と、四季の美しさを楽しめる石庭。百人一首ゆかりの小倉山を背にし、大堰川を借景として取り込む2階からの眺めは、まさに日本画の世界のようです。



1階の常設展示では100体の歌仙人形（フィギュア）と歌の英訳が並び、藤原定家によって百人一首が撰ばれた時から昨今人気の競技かるたに至るまでの変遷をご紹介します。また120畳の広々とした2階の畳ギャラリーでは、じっくり座って自由に鑑賞することも可能。石庭を望むテラスにはカフェスペースが設けられており、景色を楽しみながらお寛ぎいただけます。

